Sāmaññaphalasutta（沙門果経）と Veda 祭式

阪本（後藤）純子

1. Dīghanikāya の第二経 Sāmaññaphalasutta[1] は，言及される6人の非正統的思想家（「六師外道」）により有名である[2]．経自体の梗概は，ある特別な満月の夜に Magadha 王 Ajātasattu（Ajātaśatru）が世尊を訪れ，沙門生活のこの現世における目に見える果報を問い，世尊がそれに答えるというものである[3]．主人公の A 王には父 Bimbisāra から王位を奪い殺害した実在の人物が投影されていると思われる．この題材は後の小大乗諸仏典にしばしば取り上げられているが，本経においては王の心理状態や思想・生き方と，それを正面から受けとめて自己救済の道を示そうとする Gotama Buddha の教えとが生き生きと描かれている．両者の問答の真髄を理解する為には，まず王が世尊を訪問しようとしたその状況 ――特別な満月の夜の意味―― を的確に把握しなければならない：

(1) このように私は聞いた．ある時世尊は Rājagaha に滞在していた，王子（達）の養育者（Komārabhacca-）[4] Jīvaka（「命さん」）のマンゴー園に，1250人の比丘達という大比丘集団とともに．他方その時，Magadha の首長，Vedehī の息子 Ajātasattu 王が，丁度その日は15日目の Uposatha で Cāturmāsya の［秋祭の行われる Kattika 月の］名月の満々月の夜であったが（tadahu 'posathe pannarase komudiyā cātumāsiniyā puṇṇāya puṇṇamāya rattiyā），廷臣（rājāmacca- → 註16）達に取り囲まれ，宮殿（pāsāda-）の階上の一番良い場所へ行って座っていた．さて，M° V° A 王はまさにその Uposatha の日に感歎の語を発した：「何と心地よいのだ，諸君（bho → 註15），月明かりの夜は．何と姿優れているのだ… 何と見目麗しいのだ… 何と心を澄ませる（pāsādikā-）のだ… 何と吉祥を備えているのだ，諸君，月明かりの夜は．まさしく今，一体誰を，沙門であれ婆羅門であれ，我々（余）は囲んで崇敬すればよいであろうか，その人を囲んで崇敬していれば我々（余）の心が澄みきるような（pasīdeyya）［誰を］」．

Pāli 語 uposatha-（Amg. posaha-）の基である古インド語 upavasathá-は「（祭火の）近くに侍って夜を過ごすこと」を原義とする．髪と髭を剃って沐浴し[5]，食と性に関わる禁欲と真実語（satyavāda-）を中心とする誓戒（vratá-）を守り，心身を清く保ちつつ，祭火の傍らで神聖な満・新月の夜を過ごす古来の宗教慣習が根底にある

と推測される．Veda 祭式の枠組中では，Śrauta 祭式の中，穀物祭（íṣṭi-）に属する諸祭式（祭火設置祭，新満月祭，Cāturmāsya, Āgrayaṇa 等）の前日・前夜における準備祭を意味する術語となる[6]．穀物祭の基本形は新満月祭であるから，実質的には新月と満月の夜の潔斎として定着し，Śrauta 祭火を設置していない庶民の間にも広く行われた．この風習は仏教を始めとする新興諸宗教にも取り入れられ，半月に一度，第 14 ないし第 15 日に一定地域の比丘・比丘尼達が集合し，pāṭimokkha-（波羅提木叉）を朗唱してその半月間の行為を反省しあう uposatha-（BHS upoṣadha-, poṣadha-, poṣatha-；布薩）が律に規定された．在家信者の場合には，半月の第 8[7] 14, 15 日に 8 項目からなる戒を保って過ごした様子が経典から覗える[8]．その際，一般民衆の間で断食が重要視されたことは，Pāli 動詞 upa-vasati が「Uposatha を実行する，U の戒を守る」から「断食する」という意味に発展した事実や，Jaina 教の Posaha から覗われる[9]．

ここでは，uposatha-の語は仏教の述語としてではなく，強大な勢力を誇る Magadha 国王の，婆羅門教の伝統に則った，しかも Śrauta 祭式の一つである Cāturmāsya の第三祭 Sākamedha の準備祭という意味で用いられている．

komudiyā cātumāsiniyā は一般に「(雨季の) 4ヶ月間が終了した Kattika 月の満月に」あるいは「(雨季の) 第 4 月である K 月の...」と解されているが[10]，K 月はもはや雨季ではなく，新年から数えて第 9 月にあたる．また*cāturmāsin- > cātumāsin- に上記の意味を想定することは困難であり，Vṛddhi も説明できない．他方，komudī-(Skt. kaumudī-) は kumuda-「夜開性の白い睡蓮」の派生語で，空気の澄みきった秋 Kārttika 月の白く輝く満月の夜を指す．この満月の日に，仏教僧団では雨安居終了の儀式 Pavāraṇā（自恣）が行われ，民間では Cāturmāsya の第三祭が盛大に祝われる．従って cātumāsin-は cāturmāsya-からの派生語 cāturmāsin-「祭式 Cāturmāsya により特徴づけられた」(-māsya- + -in- > -māsin-, cf. Vārttika 5f. ad Pāṇini v 1,94 ; AiG II-2 328）に対応する Pāli 語形と判断される．同語は komudī-と結合した定型句にのみ現れるが（Vin I 155, 176–178, M III 79f., Ja-a v 262），Jātaka VI 221 の詩節中の類似表現 cātumassa-komudī-（cāturmāsya-kaumudī-）「Cāturmāsya 祭の K 月の満月」には祭式名が明示されている．

Cāturmāsya[11] は一年間に亙り 4ヶ月目毎の満月に穀物祭を繰り返す祭式で，新年（新春）・夏（雨期の開始）・秋に対応することから一般に「季節祭」と解されている．名称自体は数詞集合複合語 caturmāsa-「4ヶ月間」から作られた-ya-による Vṛddhi 派生語で，各祭の終了時に祭主が髪を切り（nivártana-），特別な誓戒（antarā-

lavrata-）を次の祭式までの 4ヶ月間保つことに由来すると思われる：cāturmāsyā́ni [vratā́ni]「4ヶ月間継続する［誓戒］」. 古代インドにおける一年は Phālguna 月（元来は冬至後に新たに現れ満ちる月であった）に始まるから，第一祭 Vaiśvadeva は同月（または翌月），第二祭 Varuṇapraghāsa は Āṣāḍha 月（または翌月），第三祭 Sākamedha は Kārttika 月（または翌月）の満月に行われる．冬至によって決定される新年から次の新年までの一年間は 12 の太陰月と 13 番目の閏月から成るので，第四祭 Śunāsīrīya が最後に付け加わる[12]．

満月が月宿 Kṛttikā（すばる）に入る夜（本経の成立に関わる B.C.5～1c. 頃には秋分月の翌月）の前日（Upavasatha）と翌日（本祭）の二日間に亙り挙行される Sākamedha 祭は，収穫祭の性格と同時に，本祭の午後挙行される盛大な祖霊祭 Mahāpitṛyajña に特色がある．これは毎月一度，新月祭の午後に行われる祖霊祭 Piṇḍapitṛyajña に対して，年に一度の大祖霊祭として ――いわば我々のお盆や欧米の万聖節のように―― 古代インドの家庭生活においては特別重要な意味を持っていたと思われる．また，この満月の夜には，禁欲を旨とする通常の Upavasatha の夜とは逆に，ご馳走に満腹して楽しく過ごすことが定められていた[13]．この祭宴の最中，先祖達を迎えようとする前夜，屋上のテラスで皓皓たる秋の名月に照らされながら，たとえ信念に基づいてであれ父を害し母を苦しめた王の心には様々な思いが去来し，平静ではいられなかったであろう．このような状況下で，王は乱れ騒ぐ心が静まり澄み亙ることになるような（pasīdeyya）教示を与えてくれる師を求めたのである．

pra-sad の派生語――pasīdeyya, pāsādika-, pāsāda-（prāsāda-：安息所，宮殿），さらに vippasanna-（vi-pra-sanna-）（後述 3：第 12 節；第 84・98 節にも現れる）―― の繰り返しは，この経典を貫く主題が pasāda-（pra-sāda-）「（水や心などが）澄みきっていること，（精神の）清澄」にあることを強調している．

2. Jīvaka の薦めにより世尊に会いに出発した A 王は突然恐怖に襲われる．

(10) すると，マンゴー園から程遠からぬ所で，M° V° A 王に恐れが生じたのだ．身のこわばりが生じた．身の毛のよだつことが生じた．そこで，M° V° A 王は恐れ，怯え，身の毛がよだち，王子（達）の養育者 J に次のように言った：「親愛な J 君，君は決して私を騙していないだろうね．J 君… 私を策略に陥れていないだろうね．J 君…私を敵対する者達に引き渡していないだろうね．というのも，どうして一体 1250 人の比丘達という大比丘集団にくしゃみの音が生じないのだろうか，咳をする音が［生じないのだろうか］，物音を立てることが［生じないのだろうか］」．「恐れなさるな，大王よ．あなたを，王様，私

は騙していません．あなたを，王様，策略に陥れていません．あなたを，王様，敵対する者達に引き渡してはいません．歩みを進めなさい，大王よ．歩みを進めなさい，大王よ．ここには灯明達が円堂の中に燃えています．」

実の父を欺いて暴力により王位を簒奪した王は，自身にも同じことが降りかかる不安に怯えていた．上述の pra-sāda-の欠如がここでも示される．

3. Jに宥められ円堂に入った王は比丘達の澄みきった静けさに驚嘆する：

(12) さて，M° V° A 王は世尊の方へと歩み寄った．歩み寄って一隅に立った．一隅に立ったまま M° V° A 王は，比丘達の集団が澄みきった（vippasanna-）池のように，各々静まりかえっており静まりかえっている（tuṇhībhūtaṃ-tuṇhībhūtaṃ）[14] のを順次観察すると，感歎の語を発した：「今ここに比丘達の集団が備えているこの落ち着き（upasama-）を私の王子 Udāyibhadda が備えた者となるように．」「あなたは，大王よ，愛情に従って行った（行動した：agamā）のですね．」「私には，御身よ（bhante）[15]，王子 Udāyibhadda が愛しい．今ここに比丘達の集団が備えているこの落ち着きを，御身よ，私の王子 Udāyibhadda が備えた者となるように．」

王が発するこの感歎の語には，息子への切実な愛情が吐露されている．U 王子はおそらく父に似て，現状に苛立ち攻撃的活動へと駆り立てられて止まない性格であったのであろう．彼は現実に後に父を殺害して王位に就いたと伝承されている（cf. Sv I 135）．しかし王は息子に殺害される恐怖に支配されていただけではなく，王子を愛していた．王が父 Bimbisāra に為した仕打ちを想い出す時，息子へのこの憂慮と心遣いとは一層悲劇的な響きを帯びる．これに対して世尊が王に呼びかける言葉は意味深長であり，王の行為全体が息子への愛情に突き動かされてなされたものと世尊が理解していたかのような印象を与える．

4. さて，正式に世尊に挨拶した後，王は次のような問いを発する：

(14)「この世には次のような個々の技能領域があり――例えば象に乗る者達（象兵）とか… あるいはまた他のこのような類の個々の技能領域があり――，まさしくこれら個々の技能領域に応じて，御身よ，彼らは現世において目に見える技能の結果を糧として生活しています．彼らはそれにより自身を幸福にし満足させ，父母を幸福にし満足させ，妻子を幸福にし満足させ，友や家内の者達（amacca-）[16] を幸福にし満足させ，沙門達や婆羅門達のもとに，天界に関わり，安楽へと実を結び，天界への帰着を齎すところの『上方へと向かう寄進（uddhaggikā- dakkhiṇā-）』を確立します．一体できるのですか，御身よ，現世において目に見える沙門の行為の結果を，これこれしかじかと（evam-evam →註 14）解らせることは」と．

uddhaggikā- dakkhiṇā-「先端が上方へと向いている（*ūrdhvāgrika-）寄進・布施（dá-

kṣiṇā-は本来『祭官への報酬』)」という語の根底にはブラーフマナ期に確立した iṣṭā-pūrtá-の理論[17] がある：(神々に) 祭られたもの (iṣṭá-) と (婆羅門祭官達に) 贈られたもの (pūrtá-) はどちらも祭火の道を昇って天界に至り，そこに蓄えられるが，死後火葬され同じ道を通って天界に到達した祭主と合体する．この iṣṭā-pūrtá-が天界における祭主の新たな肉体ないしアートマン，ならびに生活物資となり，これが尽きた時，天界において再死し地上へと転落し様々な生物の形態へと生まれ変わる．この理論は後述5の「六師外道」の説においても大前提となっている．

上に引用した質問から覗われるのは徹頭徹尾現実主義者かつ合理主義者である王の姿である．当時一般に認められていた輪廻と業の思想やそれに基づく社会道徳を，彼は決して否定していない．営々として各自の職能に勤しみ，その労働の結果により自身や家族友人をこの世において幸福にし，さらに一部を宗教者へ寄進することにより天界における死後の安楽を願う普通の人々の生き方を，彼は積極的に評価している．これに対し，労働と社会的義務を放棄する出家修行者の生き方がいかなる結果を現実に齎すのか，皮肉な態度で疑義を呈する．

5. 世尊がこの問いに答える前に，A 王はこれまで会見した 6 人の思想家達の見解を紹介する．彼らの答は共通して伝統的な iṣṭāpūrtá-の理論を否定し（この態度はとりわけ Pūraṇa Kassapa と Ajita Kesakambalin とに著しい），父を殺害した王が当然抱いていると彼らが推測した来世への不安を除去しようとするものであったが，何れも王を満足させなかった．王が知りたかったのは，沙門の生活が現実生活に齎す実際的な効用であり，世界の諸現象や人間の諸行為に関する学問的理論でも，自分自身の死後の運命についてでもなかった．

世尊の返答はまさしくこれに応えるものであった．彼の挙げる沙門生活の最初の功徳は，世俗権力から開放され，誰をも何をも恐れる必要が無くなることである．次に出家者の守るべき戒律の諸項目と禅定の諸階梯ならびに明知による洞察の諸段階とを一つ一つ解説し，どのように心身が次第に安静と清澄とを得て，この世に生きながら至福を享受するに至るかを具体的に明らかにした．このように世尊は王の求める，不安と欲望に動揺する心が現在において安静と清澄 prasāda-を得る道を教えたのである．

---

1)　D I 47-86．パラレルおよび二次文献については言及を省略する．

2)　この，いわば脚色された学説史の紹介が BĀU IV 1-2（Janaka と Yājñavalkya との対話）を手本にしたことについては DEUSSEN 60Up. 456 参照．更にそれが本経と BĀU IV

全体について該当する可能性については後藤敏文，印仏研 44-2（1996）886 参照.

3) 同様のエピソードが Ja-a I 508ff. : No. 150 Sañjīva-Jātaka および V 261ff. : No. 530 Saṃkicca-Jātaka の現在物語に引かれている（林隆嗣氏の指摘による）.

4) 名医として名高い Jīvaka は A 王の廷臣（rājāmacca-，註 16 参照）であり，komārabhacca- は官位かと推測される．Vin I 269 はこの呼称を捨子であった彼が「Abhaya 王子に養育された」ことに由来すると説明する（～本経注釈 Sv I 133）．一般には「小児科医」と解されている（cf. Skt. kumāra-bhṛtyā-, kaumāra-bhṛtya-）.

5) 筆者「髪と髭」日本仏教学会年報 59（1994）＝『仏教における聖と俗』77-90 参照.

6) Cf. HILLEBRANDT, Rituallitteratur 111f., KRICK, Das Ritual der Feuergründung 67ff.

7) 婆羅門教社会では半月の第 8 夜（Aṣṭakā）の日も神聖な日として祭られ，特に一年の最後の Ekāṣṭakā が重視された（cf. HILLEBRANDT aaO 41, 71, 79, 94ff.）.

8) 例えば Sn 400-403 ; cf. CPD s.v. aṭṭhaṅgika-（uposatha-），uposathaṅga-.

9) Cf. Ja III 444ff. : No.. 421 Gaṅgamāla-Jātaka（Uposatha の断食のために命を落とす話）; SCHUBRING, Die Lehre der Jainas 189 ; WILLIAMS, Jaina Yoga 142-149.

10) FRANKE "gerade Vollmond des Monats Kattika, der das Ende des（betreffenden）Jahres-Drittels bezeichnet"; RHYS DAVIDS "on Komudi（white water-lily）, the full moon day of the fourth month"（cf. p. 61 n. 1）; PTSD "of 4 months" ; Sv I 139 cātumāsiniyā ti cātumāsiyā. sā hi catunnaṃ māsānaṃ pariyosāna-bhūtā ti cātumāsī...

11) Cf. HILLEBRANDT aaO 115ff., EINOO Die Cāturmāsya, Tokyo 1988.

12) Cf. OLDENBERG Die Religion des Veda 442 ; EINOO aaO 300f.（Anm. 1688）.

13) Cf. EINOO aaO 174-176.

14) 活用形・不変化詞が重複されると複合語となり（後肢がアクセントを失う : āmreḍita-comp.），①連続する反復継起，②（複数の事物の）各々への該当，③厳密正確な限定，が表現される．筆者 "katháṃ-katham agnihotráṃ juhutha" Fs. Narten（印刷中）参照.

15) 丁寧な呼びかけ bhadran te（vo）> Pa. bhaddante / bhadante（bhaddanvo）「君・あなた（達）に幸いあれ」の口語的短縮形 : Pa. Amg. bhadante > bhayante > bhante（cf. 筆者 "Udayajātaka" WZKS 28, 1984, 65f.）. bhagavant-（> bhavant-）Voc. Sg. は bhagavas > bhavas > bho であり，GEIGER §98.3（Māgadhism により bhavantas > bhante）は認め難い.

16) amacca-（amā́tya-）は amā́「自宅に・で」の派生語で本来「家内の者，同居人」を意味するが，rājāmacca（rājāmātya-）「王の宮廷に属する者」即ち「王直属の家臣，廷臣」の意で広く用いられる（CPD s.v. amacca の記述は不十分）.

17) 筆者「iṣṭā-pūrtá-『祭式と布施の効力』と来世」今西順吉記念論集（1996）862-882, "Das Jenseits und iṣṭā-pūrtá- 'die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten' in der vedischen Religion", Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik（2000）475-490 を参照.

〈キーワード〉 Sāmaññaphalasutta, Ajātaśatru, Cāturmāsya, Uposatha/Upavasatha, iṣṭāpūrta

（パリ第三大学課程博士，Dr. phil.）